がんを理解し、支え合える社会へ
活用の手引（教師用）

生涯のうち、国民の２人に１人がかかると推測されるがんは重要な課題であり、健康に関する国民の基礎的素養として身に付けておくべきものとなっています。

本リーフレットは、高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）を踏まえ、文部科学省発行の「がん教育推進のための教材」（令和３年３月一部改訂）及び「外部講師を活用したがん教育ガイドライン」（令和３年３月一部改訂）を参考に作成しています。各学校でがん教育を実施する際、活用してください。

●がん教育とは

健康教育の一環として、がんについての正しい知識と、がんと向き合う人々に対する共感的な理解を深めることを通して、自他の健康と命の大切さについて学び、共に生きる社会づくりに寄与する資質や能力の育成を図ります。

がん教育の目標

1　がんについて正しく理解することができるようにする。

2　健康と命の大切さについて主体的に考えることができるようにする。

●学習指導要領における位置付け

高等学校学習指導要領 第２章 各教科 第７節 保健体育（抜粋）

2　内容

（1）　現代社会と健康について、自他や社会の課題を発見し、その解決を目指した活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。

ア　現代社会と健康について理解を深めること。

(ｳ) 生活習慣病などの予防と回復

健康の保持増進と生活習慣病などの予防と回復には、運動、食事、休養及び睡眠の調和のとれた生活の実践や疾病の早期発見、及び社会的な対策が必要であること。

3　内容の取扱い　(1)のアの(ｳ)については、がんについても取り扱うものとする。

高等学校学習指導要領解説保健体育編・体育編（抜粋）

（ｳ）生活習慣病などの予防と回復

がん、脳血管疾患、虚血性心疾患、高血圧症、脂質異常症、糖尿病などを適宜取り上げ、これらの生活習慣病などのリスクを軽減し予防するには、適切な運動、食事、休養及び睡眠など、調和のとれた健康的な生活を続けることが必要であること、定期的な健康診断やがん検診などを受診することが必要であることを理解できるようにする。

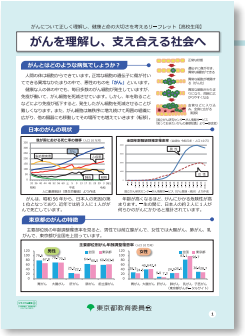
その際、がんについては、肺がん、大腸がん、胃がんなど様々な種類があり、生活習慣のみならず細菌やウイルスの感染などの原因もあることについて理解できるようにする。がんの回復においては、手術療法、化学療法（抗がん剤など）、放射線療法などの治療法があること、患者や周囲の人々の生活の質を保つことや緩和ケアが重要であることについて適宜触れるようにする。

また、生活習慣病などの予防と回復には、個人の取組とともに、健康診断やがん検診の普及、正しい情報の発信など社会的な対策が必要であることを理解できるようにする。

総則では、「高等学校教育の基本と教育課程の役割」として、体育・健康に関する指導は、生徒の発達の段階を考慮して、学校の教育活動全体を通じて適切に行うとされています。カリキュラム・マネジメントの視点から、保健体育科だけでなく特別活動や総合的な探究の時間等と関連付け、教科等横断的に取り組むことも考えられます。

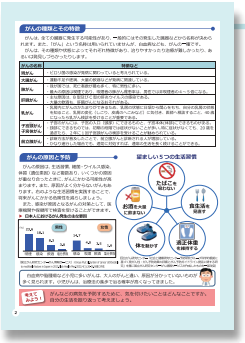
東京都教育委員会

がんについて正しく理解し、健康と命の大切さを考えるリーフレット【高校生用】「がんを理解し、支え合える社会へ」



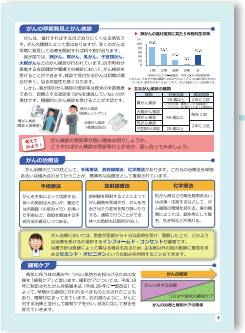
1ページ

- 高等学校では、がんについて**科学的根拠に基づいた理解をすることが主なねらいです**。
- がんの罹患率は、生涯を通じると男性の方が女性より高くなりますが、20 代から 50 代前半までは、女性の方が高くなっています。乳がんと子宮頸がんがこの年代に多いことが原因と考えられています。
- 乳がんは、女性ホルモンが分泌されている期間が長いほど発生しやすいと考えられています。



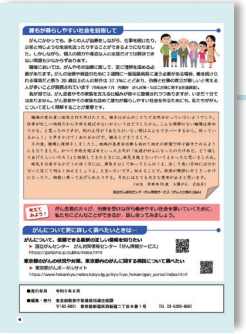
2ページ

- **喫煙はがんにかかるリスクを高めます。**日本人の場合、男性のがんの約 24%、女性のがんの約４%は喫煙が主な要因と考えられています。飲酒や塩分の取りすぎも、リスクを高める生活習慣です。また、細菌やウイルス感染によるがんもあります。がんの原因は複合的であり、原因不明のがんも多いため、**がん患者は生活習慣に問題があるといった誤った認識をもたせないように気を付けましょう。**
- 小児がんは多くが原因不明です。学校におけるがん教育では、主として大人のがんを対象としています。
- がんの怖さのみを印象付けるのではなく、**望ましい生活習慣を実践することによって、リスクを軽減できる**ことを強調します。



3ページ

- がん検診を受けない理由として「時間がない」「費用がかかる」「必要性を感じない」などが挙げられます。**がんは症状がないまま進行するため、健康なうちに国が推奨する検診を受けることが重要**です。
- 日本ではがん患者の７割近くが手術治療を受けていますが、放射線治療は３割程度です。多くのがんでは手術治療と放射線治療の治癒率は同程度ですが、日本では手術が多く行われています。



4ページ

- 現在の日本では、がん治療は入院よりも、通院が主体になりつつあります。がんが治って社会に復帰する、あるいは、がんを治しながら仕事をするという人が増えています。**職場においては、がんやその治療に関して、更に理解を広める必要があります。**
- がんの予防や治療に関する情報は日進月歩です。生徒が自ら課題を設定して調べたり、解決策を話し合ったりする学習活動を工夫しましょう。

がん教育に役立つ情報

「がんについて正しい情報を知りたい」「いい教材はないかな？」という先生方へ

指導事例やパワーポイント教材、映像資料等

▶ 文部科学省ホームページ
https://www.mext.go.jp/a_menu/kenko/hoken/1385781.htm

映像教材やアニメ教材「よくわかる！がんの授業」等

▶ 日本対がん協会ホームページ
https://www.jcancer.jp/

がんに関する正しい情報等

▶ 国立がんセンターがん対策情報センター「がん情報サービス」
https://ganjoho.jp/public/index.html

東京都のがんの状況や対策、がんに関する病院等

▶ 東京都がんポータルサイト
https://www.hokeniryo.metro.tokyo.lg.jp/iryo/iryo_hoken/gan_portal/index.html

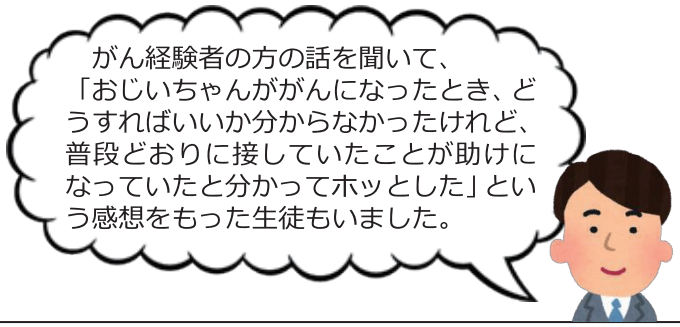
家族にがん患者やがん経験者がいる生徒への配慮

がん教育を実施する際、事前に保護者から情報を得るなどして、次のような生徒がいないか把握します。また、そのような生徒を事前に把握できない場合も、いることを前提に配慮する必要があります。

- 小児がんの当事者、又は小児がんにかかったことのある生徒がいる場合
- 家族にがん患者やがん経験者がいる生徒や、家族をがんで亡くした生徒がいる場合
- がんに限らず、重病・難病等にかかったことのある生徒や、家族に重病・難病等の患者がいたり、家族を亡くしたりした生徒がいる場合　など

<配慮の例>

- がん教育の内容や方法、実施時期を工夫する。
- 本人に限定されるような内容に特化せず、事例を一般化するなどの工夫をする。
- 授業の冒頭で「悲しくなったり、聞いているのがつらくなったりした場合は、先生に伝えてください」等の言葉掛けをする。など



外部講師の活用

がんという疾病に関する理解をねらいとした場合は、専門性の高い内容が含まれるため、学校医、がん専門医等を外部講師とした指導が効果的です。

健康や命の大切さをねらいとした場合は、がん患者やがん経験者による指導も効果的です。

<留意点>

- 教員が行う授業と、外部講師の協力を得て行う学校行事等を関連させて指導すること。
- 生徒の発達段階を十分考慮した内容や指導を心掛けるなど、学習指導上の留意点を事前に外部講師と共有すること。また、授業計画の作成に当たっては、授業を企画する教員が主体となること。
- 教員と外部講師は、授業の事前に打合せを行い、授業のねらいを確認すること。
- 生徒の家族にがん患者やがん経験者がいる場合には、がん患者やがん経験者による体験談は強い印象を与える可能性があること。
- がん教育実施上の手順例

▶準備段階の手順（例）

	企画	打合せ	準備・事前指導
学校内	保健主事、授業を担当する保健体育教諭、学級担任等を中心に核となる教員を決め、関係教職員と連携しつつ、外部講師を活用したがん教育を企画する。	教職員の共通理解を図り、実施内容等について話し合う。 また、教科書やがん教育に関わる資料を準備し、講師予定者との打合せに備える。	当日の生徒に配布する資料や使用する視聴覚機材を準備する。必要な場合には事前学習・事後指導等を行う。
関係者との調整	関係機関に講師の派遣を依頼する。 ・事前打診　・正式依頼状送付 ・打合せ日程調整	講師予定者と当日の指導内容や指導方法について打合せを行う。 ・詳細な日程　・講師と学校の役割分担 ・準備品等　・指導上の留意事項の確認	資料や視聴覚機材についての最終確認を行う。 講師と教員との役割分担についても確認する。

▶実施段階の手順（例）

	外部講師を活用したがん教育	事後指導	評価まとめ
学校内	本時におけるがん教育の目的・ねらいの説明、講師の紹介等を行う。	学校の実情に応じて、各教科等の学習内容と関連付けた指導を行う。	成果や課題について担当者で話し合い、すべての教職員で共有する。
外部講師との調整	講師との最終確認を行い、がん教育を実施する。	外部講師に授業実施後の感想などを尋ねるとともに、児童・生徒からの質問や感想を提供し、指導上の課題や事後指導について話し合う。	講師及び講師の所属先に礼状を出す。

※外部講師を活用したがん教育ガイドライン（文部科学省 令和３年３月一部改訂より）参考

がんを理解し、支え合える社会へ

1　目標

がんの特徴、予防方法、治療法などを理解するとともに、がんをめぐる社会的な事象や課題に気付き、誰もが支え合える社会の構築に向けて具体的な課題解決策を考える。

2　指導計画（３時間）

時	教科等	学習内容
1	保健体育（保健） ※単元「現代社会と健康」を指導する中の２時間	・がんの種類や特徴について、正しい知識を身に付ける。 ・がんにかかるリスクを下げる方法について整理する。
2		・がん検診を受けることの必要性、がんの治療法、緩和ケアを理解し、がんに対する社会的対策の在り方を考える。
3	特別活動（学校行事） ※学年単位で実施	・がん患者への理解を深め、支え合って生きることの大切さに気付く。 ・自分の生き方と関連付けて考え、がん患者が働きやすい社会の実現に向けた自分の行動を自己選択・決定できるようにする。

3　展開例

時	主な学習内容・学習活動	指導上の留意点
1	1　本時では、「がん」について学ぶことを知り、がんは、日本人の死因第１位であることを知る。 2　がんの種類にはどのようなものがあるか発表する。 3　種類によって、がんの特徴が異なることを知る。 4　がんの原因を知り、がんにかかるリスクを下げる方法について様々な視点から話し合う。 5　自分の生活を振り返り、今改善したいことや、将来的に気を付けたいことを考える。	○配慮を要する生徒の情報等を事前に把握しておく。 ○授業中にもし悲しくなったりつらくなったりした場合にはいつでも申し出るよう声を掛ける。 ○死亡率の推移をグラフで示す(リーフレット P.1)。 ○思いつくままに発表してよいことを知らせる。 ○資料を基に、種類別のがんの特徴に気付かせる（リーフレット P.2）。 ○望ましい生活習慣の在り方、がん検診や医療環境の在り方等の視点から、話合いを促す(リーフレット P.2)。 ○病気の予防という視点から、生活習慣に関する注意点を具体的に考える（リーフレット P.2）。
2	1　前時の学習内容を確認する。 2　がん検診の重要性と現状を理解し、がん検診の受診率を上げるにはどうすればよいか話し合う。 3　がんの治療法や緩和ケアについて理解し、自分が治療方針を決定するとしたら何を重視するか、話し合って考える。 4　本時の振り返りをワークシートにまとめる。	○早期発見の重要性を踏まえ、がん検診を受けない理由や受診率向上に向けた方策について話し合わせる（リーフレット P.3）。 ○インフォームド・コンセントやセカンド・オピニオンの重要性を踏まえ、治療の方法や効果、生活の質（QOL）、家庭や仕事等の観点から考えるよう助言する（リーフレット P.3）。 ○がんについて学習したことをワークシートに記述させる。
3	1　保健体育の学習内容を振り返る。 2　外部講師（がん患者・がん経験者）による講話を聴く。 ・実際にがんにかかったときの生活の変化や苦労、周囲の人との関わり、仕事を続けていく上で課題となったことなどに関する経験を聴く。 3　がん患者が働きやすい社会を築くためにできることをグループで話し合い、自己の考えを深める。 4　グループで話し合った内容について、外部講師から感想や意見を頂く。健康や命の大切さについて考えたことをワークシートにまとめる。また、外部講師に感謝の気持ちを伝える。	○外部講師（がん患者・がん経験者）を紹介する。講話の内容について、事前に打ち合わせておく。 ○外部講師による講話を踏まえ、がん患者が働きやすい社会について様々な観点から意見を出し合うよう助言する。 ○生徒の発表に対し、外部講師からコメントを頂く。 ○健康や命の大切さについて考えたことをワークシートに記述させる。

※評価計画等は略

●発行年月　　令和６年８月
●編集・発行　東京都教育庁指導部指導企画課
〒163-8001　東京都新宿区西新宿二丁目８番１号　　TEL 03-5320-6887

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。